

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	辻川 美和
論文題目	ジョン・フレッチャーの作劇術——観客操作と性的表象
審査要旨	
<p>審査会では、まず執筆者本人から、論文全体についての概要説明が以下のようなになされた。</p> <p>本論文は、シェイクスピアの同時代であり、シェイクスピア没後にもさらなる人気を博した劇作家、ジョン・フレッチャーの作劇方法の発展について、特に観客に対する情報の操作と性的表象を焦点として分析するものである。シェイクスピアでは観客は劇における全ての情報をさまざまな人物を通じて知らされ、全知という状況に置かれるのだが、フレッチャーの場合は、その一部を隠したり、全く触れずに最後に観客を驚かせるといった手法がとられていることが大きな特徴である。</p> <p>論文は3部構成になっており、第1部では「コンヴェンションと観客への情報操作」と題して、これまで他の劇作家たちが劇的手法として使ってきたものをフレッチャーがどのように変えたかが詳細に論じられている。特にこの部分では、歌の多用によりどのような観客への効果があるのかが詳細に分析され、各劇による具体例が示されている。超自然の存在を呼び出したりする際にも、1610年代後半の『めぐりあわせ (<i>Chances</i>)』では、「魔術師」が歌で呼び出す「魔女」が本物なのかどうかという情報が観客から隠され、パロディも含む喜劇的な場面を作り出している。</p> <p>第2部では、「異性装とエロティシズム」と題して、フレッチャー特有の観客に対する情報操作の手法の発展が異性装という手法ではどのように発展しているのかを分析している。フレッチャーは、男装という手法を初期の段階で使っており、彼特有の観客から情報を隠しつつヒントを出して観客を翻弄するような情報の出し方の手法を確立した。さらに1610年以降は、観客が男装を見破ろうとする心構えの強化に応じて、観客の心構えも計算に入れ、意図的に見破らせるための伏線を張る観客操作へと移行した。</p> <p>第3部では「後期の喜劇における女性の表現」と題して、後期の2作品『妻を御して妻を持って』と『巡礼』を取り上げ、『妻を御して妻を持って』の観客操作の方法を分析すると同時に、後期の作品に現れたみだらな女性のタイプと貞淑な女性のタイプが融合した新しい女性のタイプが現れてきたことを明確にしている。</p> <p>こうした、数多くの約束事を中心に観客から情報を隠しつつヒントを与えて観客に推理させる操作は、当時の知的な観客の好みと、フレッチャー自身の作劇術の好みを両方とも反映しているのではないかと考えられる。また、シェイクスピアのようにドラマティック・アイロニーを追及するのではなく、観客にヒントを与え、観客に挑戦するといった技法がフレッチャーの特色だと言える。</p> <p>本論文で、このように、重要な情報を隠しながらヒントを与えるジョン・フレッチャー特有の観客操作と、エロティシズムや女性像の提示の仕方に焦点を当てて、特に言及されることの少なかったフレッチャーの中期から後期の作品を中心に時代の状況を考察しつつ分析することにより、フレッチャーの劇作品の意義とともに、これまで明確にされてこなかった当時の観客の意識やその変化の一部も明らかにされた。</p> <p>審査会では、論文執筆者本人による概要説明の後、質問とともに、以下のような意見と問題点が挙げられた。</p>	

氏名 辻川 美和

本論文が高く評価できる点として、フレッチャーの全作品を扱った研究を成し遂げたということがまず挙げられる。フレッチャーは他の劇作家との共作も多いため、共作の面からの研究が非常に多く、単独でフレッチャーの劇作の意義を論じたものはほとんどない。この点で、フレッチャー単独作の全ての作品を分析・分類した本論文は、これまでの先行研究にはない独自性を持つ。さらに、劇作品としての研究はあっても、観客操作という視点からの網羅的な研究書・論文はこれまでないことに加え、特に女性表象を中心に、さまざまな劇的手法（デヴァイス）を詳細に分析したことは大きな重要性をもつものであり、その意義は極めて大きいと言える。

しかしながら、この時代の演劇におけるフレッチャーの位置や特異性などについては本論ではほとんど触れられておらず、今後の課題としてさらなる研究を進めるべきだとの指摘もなされた。また、論文ではフレッチャーの手法の時代区分として1610年と1620年という区切りがなされているが、1614年にはCity Comedy（ロンドンの市民を描いた喜劇）が終焉を迎えるので、その前と後との差異を演劇界を取り巻く環境を明確にしてフレッチャーの劇を論ずることも必要だという点も指摘された。

本論文ではフレッチャーの悲喜劇および喜劇を取り上げているが、数は少ないものの、悲劇にも重要な作品があるので、悲劇の分析もさらにした方がよいという提案もなされた。さらに、王政復古劇との類似性と差異についても本論では論じられていないため、今後の発展としてその分析研究が期待される。とりわけ、フレッチャーという劇作家を、シェイクスピア以前と以降という演劇史の中で明確に位置付けることも重要であるので、今後はそうした広い視野からの研究も望まれるとの意見もあった。

以上の審査の内容を踏まえ、論文と口述諮問の内容を総合的に判断した結果、審査委員一同は、辻川美和氏の論文が博士(文学)の学位の授与に十分に値すると判定した。

公開審査会開催日	2020年 1月 25日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	冬木 ひろみ	16・17世紀イギリス演劇	
審査委員	早稲田大学法学学術院・教授	本山 哲人	16・17世紀イギリス演劇	博士(国際基督教大学)
審査委員	専修大学文学部・教授	末廣 幹	16～18世紀イギリス演劇	
審査委員				
審査委員				